校長先生の部屋だより

哲学ルームだより

この「哲学ルーム」は、生徒、先生の区別なく、共に学校スローガンである「人間を学ぶ」空間です。
今月のテーマは、「円はどこにある？」です。

こんにちは。今月は「形のないものにして形の本質」を考えています。今回はすこし趣を変えて、詩の解釈を試みてみたいと思います。

「花」

石垣りん

夜ふけ、ふと目をさました。

私の部屋の片隅で

大輪の菊たちが起きている

明日にはもう衰えを見せる

この満開の美しさから出発しなければならない

遠い旅立ちを前にして

どうしても眠るわけには行かない花たちが

みんなで支度をしていたのだ。

ひそかなそのにぎわいに。

この詩は第１連と第４連が外枠を成しています。第１連と第４連末に付された読点がそのことを示していると思われます。したがってこの部分は

夜ふけ、ふと目を覚ました。ひそかなにぎわいに。

と読めます。
「ひそかなにぎわいに」よって目覚めた、と言うのは目覚めた所からの後付けです。しかし作者は目覚めをそのように捉えた。
もちろん事柄としては「目覚め」が先に来ます。目覚めは突如として起こります。第１連はこうした目覚めの突如性を示しています。その突如性を端的に示しているのが「ふと」という語です。しかしこの詩では目覚めに先立つものがあります。それが「夜ふけ」です。
第１連と第４連は出来事そのものです。作者はこの出来事を「夜ふけに、ひそかなにぎわいにふと目を覚ました」と捉えたのです。そこに見たものが「ひそかなにぎわい」です。
第２連と第３連は外枠に対して中身を成しています。すなわち目覚めの内容、「ひそかなにぎわい」の内実です。そこに作者は菊を通して生あるものはみんなで死への旅立ちの支度をしているという、生の真相を見ました。「出発しなければならない」「眠るわけには行かない」のはそれが生の定めだからです。「遠い旅立ち」とは死が遠くにある、ということではなく、旅立ち、すなわち死そのものの遠さを言っています。
「ひそかなにぎわい」は音について言われています。作者は夜ふけの静まり返った部屋の静けさの内に、菊たちのにぎやかな音を聞いたのです。しかしそれは同時に色と形、さらには生あるものすべてについての「ひそかなにぎわい」です。沈黙をよく聞き取る者のみがにぎやかさを聞き取ることができます。そうでなければただうるさいだけでしょう。同様に形や色のない所を見るもののみが、形や色のにぎわいを見ることができます。さらに死をよく見るもののみが生のにぎわいを見ることができます。この詩ではそうした音、形、色、生がみんなで死への旅立ちをしている姿を描きながら、悲壮感は微塵もありません。そこには静謐で見守るような温かさがあります。
第１連に戻ります。「夜ふけ」は無であり、死です。そこから「ふと」目を覚ます。「目覚め」は生です。生あるものはそこから始めなければなりません。死への旅立ちに向っての支度を。しかしそうした生は死より生まれ出でるものであるが故ににぎやかなのです。
菊の「ひそかなにぎわい」によって目が覚めるということは通常、ありません。しかし作者はそのように捉えた。その目覚めは肉体的な目覚めであると同時に生の真相の目覚めでもあったでしょう。

今回は詩において「形なきものにして形の本質」を考えて見ました。次回は音楽について考えて見たいと思います。